

第1回委員会 会議録（要旨）

日時：令和5年4月27日（木）13：15～17：05

場所：市役所本庁舎2階3号会議室

出席委員：阿知良委員長、武田副委員長、今泉委員、松永委員、沼田委員、木下委員

欠席者：なし

事務局：中野地域生活課長、青山市民生活係長、西村主査

【開会】

地域生活課中野課長挨拶

【まちづくり活動支援補助金アンケート結果配布】

前回の委員会で補助金の見直しの説明後、委員のご意見を踏まえ、過去に補助金の活用があった団体と、活用したことがない市民活動センター登録団体向けにアンケートを実施した結果を委員に配布。見直しの概要については、今回の市長選挙後の青山市長の選挙公約を踏まえて前回説明した内容から変わる可能性もあるため、改めて内部で精査しある程度固まった段階で改めて説明したい旨報告した。

【委員長・副委員長選出】

委員からの推薦により昨年同様、学識経験者の室蘭工業大学准教授阿知良委員が委員長に、助教武田委員が副委員長に就任することが承認された。

【室蘭市まちづくり活動支援補助金（第1期応募事業）に係る補助事業の選考】

第1期応募事業及び実績報告事業の概要説明（事務局より）及び、補助事業事前確認

【選考会】

○子ども食堂クル事業

●申請事業プレゼン

- ・R4年度は5月7日～3月24日まで、毎週土曜日に子ども食堂を開設
- ・経済的理由や家庭の事情などで栄養なある食事をとることのできない子どもや保護者含めた多世代を支援。
- ・小学校・中学校、町内会にチラシを配布し周知を行った。
- ・毎週土曜日の10：30～14：00まで食事提供や遊び、学習支援。開催回数は48回、延べ参加人数425名。10月くらいから周知の効果がでて参加人数増えた。

●質疑応答

D委員：予算書では大人の参加者が200名のところ実際は40名だったということで、全体の参加人数425人というのが想定内だったのか、もう少し集める予定だったのか。今年度はどのぐらいの人たちに来てもらう予定でいるのか伺いたい。

団 体：人数全体はすごく多かったと思っている。10月ぐらいまでは1回10人程度の小規模で行っていたが、11月ぐらいから急に増え出し、30人ぐらい集まるようになった。どうしても子ども食堂ということで子ども中心になってしまうので単独で大人が来づらい部分はある。

全体的な人数としては今年度も同じように、1回30人ぐらいで考えている。

B 委員：予算では大人の参加者の参加者負担金48,000円を見込んでいたが、実績は40人ということで、その差額は自己負担となってしまっている。令和5年度も同じ額で参加者負担金を見ているが、大人の参加人数を増やす方法を何か考えているのか、また、前年は70,000円見込んでいた寄付金額が20,000円に減って、その分自己負担で予算を見ているが大丈夫なのか。

団 体：収入を考えると大人の参加者を増やす必要があるが、子ども食堂なので子どもを沢山受け入れるという目的があるため難しい部分がある。

子どもにお腹いっぱい食べさせたい、という思いの反面それにより食材費も上がってしまう。その分はクラウドファンディングや食材の仕入れの見直し、余った食材など寄付を募る形で維持していきたい。

E 委員：最近利用者が増えているということだが、運営側の人手、支援体制は大丈夫か。

団 体：運営側としては、他事業でスタッフの人件費を補助いただいたり、高校生などにボランティアを呼びかけたりしている。

F 委員：今回人件費は助成金で賄えたということだが、それも期限がある。それがなくなった時のために自分たちで運営がうまく回るような仕組みを少しずつ作っていった方がいいかなと思うがその辺の考えは。

団 体：寄付として、クラウドファンディング自体は1回きりではなくてマンスリーサポーターという毎月寄付をしてくれる支援者を集める形を考えている。また、子どもたちには遊んでご飯を食べるだけでなく、一緒に料理や片づけをするような仕組みも作りたいと思っている。ボランティアに関しては、最近日鋼看護学院の学生が来てくれる話もあるので、そういう受け皿を増やしていきたい。

C 委員：実際に参加してくる子どもたちの中で、事業の目的としている孤食の子供だとか社会的に恵まれない感じの子がいるのか、調べたり聞いたりということはあるのか。

団 体：特に個人情報には聞いていない。自分は子ども食堂というのは公園みたいなもので、誰も来れるような場所だという考えに賛同している。誰でも来ることができて、誰でもそこで食べることができて自由にできるというような考えがあって、その中の子どもの中に貧困などのケースはあるかもしれないが、そこまでは聞いていない。

A 委員：対外的な発信としては誰でも受け入れるということでもいいと思うが、事業の改善のためにもモニタリングできるようなことがあればいいと考える。

団 体：食事に来る子どもに普段はどんなものを食べているか聞いてみるのもいいのかと思っている。

## ○移動型による住民交流・つながりの場づくり事業

## ●申請事業プレゼン

・9月4日の、旧中央町たのしま横丁でのたのしまテントではベーゴマ道場や室蘭清水丘高校の生徒有志を対象にした焼き芋体験販売の運営指導を行った。

効果としては、講座体験による交流の場の提供及びイベント主催者も含めた地域の交流増進が図られた。

また、高校生に火の起こし方や焼き方、接客まで体験実践してもらうことによって学生スタッフの活躍の場や担い手育成の効果が得られた。

- ・10月29日の中島公園の秋祭りでは、ベーゴマ道場とホットサンドづくり体験を通して焚き火を使った料理の学習や昔の遊び体験を行うことで、参加者同士が交流できる体験の場の提供による居場所づくりや生きがい創出につながったと考える。

また、他の出店者と交流を深め、料理教室の講師協力を依頼したことから、イベント内での交流による講師人材の発掘ができた。

- ・R5年度は5月から3月までで7回開催することを想定。
- ・内容は、R4年度と同様これまでのつながりを生かし、ヨガ体験、藍染体験、ホットサンド作り、ベーゴマ体験を考えている。
- ・体験講座で参加費用を徴収して補助金なしでも継続できる体制をめざす。
- ・今までの成果として外部のイベントでつながった事業者が折り紙講座をやってくれたり月に1度の読み聞かせをしてくれたりと他の事業者のイベント参加が見られる。これはつながりによって新しいサービスができたと考えている。
- ・ベーゴマは純粹に子どもたちがファンになってきてくれるというところから、人に教えられるところ、講師というところまで育成して各地で開催することで、子どもたちが親や大学生、高齢者など世代を問わず、交流するきっかけとできるようなしくみを作っていきたい。

## ●質疑応答

**B 委員：**令和4年度のたのしま横町のイベントで、清水丘高校の学生を巻き込んで実施したのはとてもいい。参加した人が次の活動の担い手となるよう令和5年度もやっていただきたい。

**E 委員：**今年も7回開催予定ということで、コロナが落ち着いてきているいろんな場所でまたイベントができるようになってきたりするので、これまでと違ったエリアなどでつながっていこうと想定はあるか。

**団 体：**新しいつながりとしては、自分たちから新たに来てください、というだけじゃなくて周りから来てくださいというようになって、新規の場所に出ていっている。

**F 委員：**B 委員と同様、高校生に声をかけて一緒に実施したのはすごくいいと感じた。その高校生たちに次ここにイベントやるけどもお手伝いしてみないという声掛けをしてるのかどうか、また、工大生も手伝ってくれているが、できれば高校生と工大生をつないで、同じイベントで一緒にボランティアをして、世代の違う人たちとつながることによっていろんな面で勉強があると思うがそういうことをやってきたのか、もしやっていなかったとしたら、今年度、ぜひそのようなことも心がけて、ボランティア同士のつながりもつくって行って欲しい。

**団 体：**高校生のイベントは、中央町たのしま横町の主催者から高校生とつながりがで

きたからぜひと声をかけてもらった。主催者とのつながりは続いているので、高校生と連携できるチャンスがあったらぜひやらせてもらいたい。

大学生に関しては、工大カフエ t e n t o の中にハンモックという学生組織があって、そこで高校生向けのイベントを一度実施したことがあるので、そこから少しずつ高校生も一緒にイベント企画することも視野に入れながら活動していきたい。

C 委員：事業を実施していて、定款にもあるような自分たちの目的に近づいてきたという実感はあるか。

団 体：目標としてこの地域周辺、西胆振の色々な人とつながりたいと思っているが、イベントでどんどん知り合いが増えたり、自分もやりたいなど、室蘭以外のいろんな人たちから声がかかることが増えてきているので、その辺でつながりの拠点として実感はだんだん出てきている。

## ○室蘭の歴史・文化の魅力発信事業

### ●申請事業プレゼン

- ・令和4年度はピリカノカ絵鞆半島外海岸について、アイヌ語地名解説をメインとしたパネルを設置した。
- ・パネルでは会員が撮影したドローン写真と地名の解説などを組み合わせ、景色の美しさとともにアイヌ語の地名を解説して、景色にもアイヌ語にも興味を持っていただけた。
- ・1月に市民活動センターで試作版を展示した際は100名を超える来場者があった。
- ・アンケートではピリカノカについて知っていた方と知らなかった方の数は半々で、地名を知っていても風景の美しさに驚いたという意見や、室蘭のアイヌ語地名の多さを改めて知ったという意見があった。特に写真の美しさについては高評価だった。
- ・若い世代にもパネルを見ていただけるようデザインを工夫した。
- ・R5年度は、縄文から炭鉄港、現在まで天然の良港である室蘭港の歴史解説について、市内外の地方史家の協力を仰ぎ、パンフレットを制作する。
- ・旧絵鞆小学校の校舎等の屋上から室蘭港を一望できる風景を間近に見ながら天然の良港として活用されてきた歴史を学ぶことができれば、室蘭の歴史がより身近になるのではないかと考えている。
- ・コンテンツとしてどのようなものを取り上げるかは市民ワークショップなどを行って仮の資料を制作した後に旧絵鞆小の来館者にモニターとして協力していただき、屋上階において室蘭港を見ながら実際に歴史解説数回行って意見をいただいた上で最終的な資料を制作するという流れを考えている。
- ・制作した資料は旧絵鞆小学校の来館者に配布するほか、教育旅行等の歴史学習素材に活用したい。
- ・道内他地域にはない縄文から近代現代の重工業まで連続して発展してきた室蘭港の歴史を解説することで、炭鉄港でつながりを深めた空知地方からの教育旅行誘致にもつながるのではないかと考えている。

### ●質疑応答

- B 委員**：質問ではなく意見だが、1年目は名勝ピリカノカ、2年目は炭鉄港というふう  
にテーマを変えろということだが、これに1年目の絵鞆半島のテーマも引き続  
き発展、拡充を継続してほしいと思っている。室蘭市民だけではなく、観光客  
や例えば海外の方などは、特にこういった景勝地とか固有の地形とか好きだ  
と思うので、そういった方に向けても発信を続けていってほしい。
- 団 体**：実際に船で見てほしいと思うので、地球岬までのクルーズの紹介やパンフレ  
ットを配るなど団体として連携を探っていきたい。アイヌ文化は発信の仕方が少  
し難しいとは感じたが、白老のウポポイもあるので、そういうところからのア  
イヌの地名が残っている室蘭の発信も、お客さんが来てくれるきっかけの一つ  
になると思うので、今後も続けて発信していきたい。
- E 委員**：どんどん続けてやっていっていただきたいと思うが、どうしても収益化が難  
しい事業だと思う。そのあたり、これからどんな活動を考えているか。
- 団 体**：絵鞆小の見学について、今のところ旅行会社から3回予定していただい  
る。こういう解説も含めた形で少しずつ有料ガイドを増やしていきたい。教育旅行も  
小規模校で来ているのでその際にも連携してPRさせてもらいたいと思ってい  
る。
- F 委員**：今年度は港を中心としたパンフレットを作るということだがどのようなパンフ  
レットを何部つくるといった具体的な内容は決まっているか。
- 団 体**：まだ色々アイデアはあるが固まっていない。去年室蘭港の一部が土木遺産に  
指定されたので、その部分は入れたいがその他については絵鞆小の屋上から見  
えるところを中心に、これから会員や皆さんの意見を聞いて決めたい。
- F 委員**：パンフレットなので素晴らしいものを少ししか作らないというのではなくて、  
たくさん作っていろんなところで沢山の人の見てもらうのが初年度はいいと  
思う。また、作成の際、絵鞆小来館者をモニターに、とあるが、できれば市民  
向けにモニターを募ったり近くの町会にも話しかけてモニターになってもら  
ったりと一般市民の方にモニターになってもらうことも検討してもらいたい。  
モニターになった人の意識も変わってくると思う。
- 団 体**：ぜひ実施させていただきたい。
- C 委員**：これは希望だが、観光ボランティアガイドとの連携について、最近の子ども  
たち、特に小学生は室蘭の良いところというものを知らないという話がでて  
いる。知らないから、室蘭を愛せない、室蘭から離れてしまうというような  
ことが、話されていた。この事業は学術的、専門的な面があるが、そういう  
中で楽しい話が上手なのは、同じく室蘭を紹介する観光ボランティアだと思  
うので、機会があれば協力しながら子どもたちに室蘭の良さを、こういうよ  
うなところが室蘭のみんなが住んでいる場所にあるということ、連携して  
子供たちに伝える機会を作っていただければと思う。
- 団 体**：子どもたちに伝える方法としては、他で教育委員会の委託事業として発  
掘体験を行っているので、そこで体験をしていただいた子どもたちに続け  
て展示を見てもらうという事を考えている。去年も発掘体験した後に縄文  
の展示室も見ていただいた際、子どもたちもすごく喜んでいたので、同  
様に行いたい。観光ボランティアガイド協議会には自分も会員でもある  
ので、連携をしていければと

思っている。

A 委員：教育旅行における、先生たちのニーズはそれぞれ少し違うと思うが、室蘭にきたからこれを学びたい、というのがあるのか。

団 体：やはりものづくりをしたりとか、日本製鉄などはニーズがある。ただ、室蘭の歴史というところにはまだ目が行ってないので、歴史に目を行かせるために円形校舎の珍しさを利用できるのではないかと思っていて、コースとしてはものづくりを体験した後に道の駅をみたらで休憩、白鳥大橋を渡って行くというコース。その間でもう一箇所のここも寄ってもらって縄文もありますよ、という発信ができればいいかなと思っている。

A 委員：ぜひ、室蘭の歴史学習のオリジナリティを発信していただきたい。

## ○中央町エリアにぎわいづくり事業

### ●申請事業プレゼン

- ・令和4年度は中央町まち歩き探検として、調査4回、内見ツアー1回行った。これまで街並みがが老朽化してる、シャッターが閉まってるなどとは言いながら、なかなか実際に見る機会がなかったため、今回ツアーを作って歩いてまわったのは参加者の方から非常に好評だった。
- ・たのしまテントは旧たのしま横丁を使った取り組みが3回、中央町小公園を使った取り組みが2回。音楽フェスとか、飲食ブースなど好評だった。小公園は音を出すイベントに非常に適しているが、公園なので使い方には今後市との協議が必要。
- ・勉強会のエリマネ塾（小）は4回、講演会としてエリマネ塾（大）1回開催。講演会は3月20日に商店街活性化セミナーとして、先進地の方を呼んで講演してもらった。こういったものを頻繁にやってもらいたいという声もあった。
- ・令和5年度も4年度と同様まち歩き探検団とたのしまテント、エリエリマネ塾を予定。

### ●質疑応答

B 委員：令和4年度の空き店舗の内見ツアー参加者はどちらからこられたのか。室蘭市の中央町付近の方なのか、市外の方なのか。

団 体：室蘭市内の方が多くて、店舗を探している方が数名参加してくれた。実際に行った内見ツアーの中の物件には該当しなかったが、店をしたいとか探しているという潜在ニーズのある方が3、4名いた。また、店までは具体的には考えていないが、いつか何かしてみたいというような方も参加してくださったので、そういった方とつながれるいい機会になったと感じている。

B 委員：呼ぶのが中央町付近の方だと、店舗があるのを知ったとしてもやることのないから使ってないのかなと結局内検しても使われないのではと懸念していたので、使ってもらえる可能性がある方を呼べていたと思う。令和5年度もそういったニーズがある方が内見ツアーくるように、呼ぶ方の属性を気を付けると思う。

団 体：市内の方が空き店舗を使うことにはならないと思うので、登別や広域の方を含めて室蘭市に来てくれる方を作っていかなければならないと考えている。そのため内定ツアーに来られる方も大きな範囲の中で呼びかける方が効果的と思っている。令和4年度に行って少し手ごたえがあったので、そういった部分を

5年度に展開していきたい

E 委員：資料の中に学生の参加が積極的、と書いてあるが、学生は大学生が多いのか、高校生が多いのか。

団 体：大学生が多いが、清水丘高や工業高校の生徒さんも参加してくれて、その子たちは毎回参加してくれるようになって、つながりもできた。

E 委員：若い人参加してもらったら、内見で借りるわけではないかもしれないが、意外なアイデアがあったりすると面白いと思うので、ぜひ若い人を取り込んで行ってもらえたら盛り上がるんじゃないか、という感想と、商店街の既存のお店の人たちも、声はかけているかもしれないが、もっともっと巻き込んで一緒にやっていると思ってもらえるように、頑張っって声かけをして一体になってもらいたい。

団 体：それは自分らも感じているところで、これには経験と積み重ね、時間の積み重ねが必要と思っているので、今年も諦めないでやっていきたいと思っている。

D 委員：空き店舗の内見の時に10件くらいピックアップして3件内見が可能だったとのことだが、あとの7件見れなかった理由は権利関係などか。

団 体：内見をしたいといってシャッターを開けてくれる理解のある所がそれほど多くない。自分たちに実績がついてくれば協力してくれる方が増えると思っている。ゆくゆくは自分たちで組織をちゃんとつくって、まちづくりとしての一環で、そういう空き店舗のマッチングやリニューアルも含めて事業をやっていければと思っている。

C 委員：事業の実施回数も多く感心している。これらの各事業を行うときには役員含めて応援してくれる人とかもいるのか。

団 体：若干いる。

C 委員：地元の商店街など、恐らく最初の頃はきっと珍しい目で見えていたんじゃないかと思うが、1年間通ってみて雰囲気はどうか。

団 体：最初の頃は、この人達は何をしてるんだ、という感じも多かったが、1年やってきある程度活動に理解をいただいております、最近は会長さんとも仲良くなって来年どうしようかみたいな話もしてるので、徐々に我々の中に入ってきてながらの活動になるのかなという気持ちは持っている。なかなか大変だとは思いますが。

C 委員：ぜひ商店街と上手にやっていっていただければと思う。

F 委員：自分も一市民として何回かたのしまテントも見させていただいたが、日曜日でテントの一角は賑わっているが、向こうを見渡すと全然店がやっていない。そうになると、本当に中央町の賑わいというのがなかなか難しいと思うので、やっぱり地道に時間はかかると思うが商店街や町内会の方たちと話をしながら、少しでも出てきてもらったり手伝いしてもらって巻き込むことをしてほしい。

団 体：イベントの賑わいづくりは一過性で終わってしまうので、そこから広がってまちづくりにどうつなげていくかを考えながら、いろんなプログラムをつくっていききたい。

F 委員：エリマネ塾（大）だが、参加者25人は少ないという印象。せっかくいい先生呼んでいいお話してもらってるのにすごくもったいないなという気がするの

で、今年はずいぶん PR、周知を。

団 体：どう周知をしていこうかというのは今、みんなで話をしているので早めの告知とか自分たちの認知度が高くなるよう頑張りたい。今年度エリマネ塾で呼ぶ講師の方はかなり著名な方だが、ただ聞いて満足して帰ってしまうのではなく、これからのまちづくりを考えていくように持っていくことが自分たちの役目と思っている。

A 委員：中央町の商店の方々の思いとか、あるいは商店の方々に思っている主体性とか危機感を聞く機会はあるのか。

団 体：令和 6 年に周辺の商店街の人たちと交流会を開こうと考えている。昨年商工会議所さんが中央町のまちづくりビジョンを作られたので、それを発表していただいて、意見交換しながら顔と顔の見える関係を深めて、それからエリマネ塾なりテントなり探検などを進めていけるといいかな、と思っている。

## ○ごちゃまぜのまちづくりははじめの一步 2022 事業

### ●申請事業プレゼン

- ・令和 4 年度は神奈川県藤沢市より、高齢者介護事業所をプラットフォームとして共生の街づくりを実践しているあおいけあの加藤代表を講師にお招きしてごちゃまぜの街づくりについて講演会を行った。
- ・実施による効果として、市民に対するごちゃまぜ理念の理解の浸透、ごちゃまぜの街づくりメンバーの増員、ごちゃまぜの街づくりに向けた活動の強化、NPO 法人ごちゃまぜの街をつくる会の周知が図られた。
- ・アンケート自由回答の結果でも、非常に熱のこもった意見を多数いただき、講演を通じてごちゃまぜのまちづくりへの一定の理解を得たものと考えている。
- ・R5 年度は慶應義塾大学大学院の堀田聡子教授を講師に招き、認知症になっても安心して暮らし続けることができるごちゃまぜのまちづくりをテーマに講演予定。併せて、パネルディスカッション形式で認知症当事者とその家族にも登壇いただき、当事者の視点から共生型社会に求めることなどの意見を伺う。
- ・講演会を通じて、まだ一般的には社会的弱者とされる認知症の方もその人の個性を認め合うごちゃまぜ社会の中では引き続き自分らしく生活することができるということを広く伝えることで、地域共生社会実現に向けた賛同者の増加、認知症への理解が深まることによる地域での支え合い活動の増加、そして認知症患者及び家族の社会参加の機会の増加などの効果が期待できる。
- ・将来的には認知症の方の社会参加機会の創出や家族のレスパイト支援なども行っていきたい。

### ●質疑応答

D 委員：決算書や予算書を見ると協賛金の割合が大きいですが、今後も協賛金を主な収入とする目途は立っているのか。

団 体：予算は過去の協賛金の実績から算出しており、今年度も同程度の金額の協賛金は入る予定。

NPO 法人なので、協賛金というよりも会員という形で会費で運営していくというのが本来だと思うので、継続的に協賛いただいている企業には会員という形

のでできるようにしたい。

F 委員：ごちゃまぜの理念はいろんな多様な人々が集まっているという趣旨だと思うが、障がい者とか認知症、高齢者とかの中に、今後 LGBTQ の人たちもとも一緒にいろんなことをやっていっていただきたい。

団 体：今年度は認知症ってことでい進めてるが、社会的少数者の理解促進も進めたい。

E 委員：とてもいい講演されていたりとかで、ごちゃまぜの輪が広がっているのを感じている。中でも資料にあるとおり、ちゃんと事業の効果、検証をしているところが生きてきているのかなと思うし、アンケートの結果を見てもなかなかこんなにびっしり書いてくれることはないと思うので関心の高さが伺える。ただ、一生懸命告知とかされていて、結構ポスターやチラシをあちこちに貼りまくっても知らなかったと言われるのが広報なので、より一層皆さんへの周知を頑張っていたいて、困っている人を救ったり、いろんな人を巻き込んでほしい。

団 体：アンケートの結果の中で唯一、告知については低めの数値だったので、自分たちも去年は告知が遅かったと反省している。

D 委員：インターネット視聴の方は思ったより伸びていなかったようだが。

団 体：北海道以外の人たちも見たりしてくれているので、あったほうがいいとは思いますが、なかなか周知が間に合わないというのが現状。また、昨年度の講演は高齢者分野のほうで有名な方で、受講者も高齢の方が多く、インターネットの環境が整ってなかったり操作方法もわからない、ということもあった。

A 委員：ごちゃまぜの街づくりをする単位としては小中学校校区内で実現するイメージか。室蘭全体だと広すぎる気がするが生活圏域に即して具体化していくということになるのか。

団 体：こういった活動を通じてそこそこの生活圏域の中で拠点が立ち上がって展開していくのが理想だが、現段階ではまず。広く地域住民に対してこういった活動があると、ごちゃまぜの社会自体がそもそも何?と言われることが圧倒的に多いので、まずは全体に周知していくことを数年間やっていきたい。その中でごちゃまぜの理念に賛同した所が中心になって活動を推進していくというような広がりができるればいいと思っている。

C 委員：1年間やってみて大変さ、あるいは楽しさ、今後に向けて感じてることは。

団 体：各種活動を通じてして賛同者も増えてきて、やることがどんどん多くなっていく一方で、限られた人数の中で事業を推進していくには、もう少しシステムチックにやっていかないと理想だけで終わってしまいそうな感じもするので、その辺をもっとしっかりと検証していかないといけないと感じている。

C 委員：十分検証しながら頑張してほしい。

## ○室蘭観光ガイド養成講座事業

### ●申請事業プレゼン

- ・令和4年度の事業として、室蘭観光クイズを完成させた。
- ・2月にガイド養成講座として特別講演会を開催。講師は室蘭民報社工藤会長と元室蘭図書館長の山下さんを招き、59名の参加があった。
- ・ガイドの実地講座として白鳥大橋主塔クルーズ1回目12名、2回目12名の募集を

したところ 40～50 名の応募があり、大変好評だった。

- ・バスでの実地講習として測量山・炭鉄鋼の遺産巡りのツアーを計画したが、年度末で募集期間が短く応募者が少なかったため中止とした。
- ・令和 5 年度は 4 年度に作成した観光クイズを利用しながら、バスで巡る実地の研修を行う。
- ・ガイドのマニュアルとなるガイド手習い帳を発行するほか、外部から講師を招きガイドの研修を行う。
- ・新しい夜景コースとして楽山についての研修についても検討している。
- ・将来的には、室蘭の観光ガイド検定試験に結びつけていきたい。

#### ●質疑応答

F 委員：今回、事業名が観光ガイド養成講座事業は、1 から 7 までの講座があるがこれは最初募集を受けて、その方々がこの 7 回全部受けるということか。

団 体：その都度募集して受講ということになる。できれば全部継続して受けていただきたいと思うが。

E 委員：とてもいいクイズの冊子となっている。検定も考えていることなので、ぜひ、検定も立ち上げて、より多くの人を巻き込んで全市民がガイドできるような感じになってくれたらいいなと願っている。

団 体：他のガイドブックにはない、ここでしか聞けないというようなことをできるだけ、入れて付加価値を付けたつもり。

F 委員：冊子はどこに配布するのか。

団 体：今年度講座を受ける方に配布する予定。

A 委員：ボランティアガイドというのは、ある程度時間に余裕ができた世代が担うのかそれとも若い人に声をかけたいのか。

団 体：若い人に声をかけたいが、現役世代は難しい。コロナ前、豪華客船が来た時には海星学院の生徒が英語の勉強も兼ねて手伝っていた。

学生がバスに乗ってガイドしたり、お茶の説明を英語でしたり、習字の書き方やお花の生け方の手伝いをしながら、英語で紹介をしていただくなど学校全体で取り組んでいた。

A 委員：高校生は地元の人だから相手に学んでもらいつつ、自分でもやってみつつで良いことだと思う。

団 体：今回も講演会を土日に設定してできるだけ若い人来てもらいたいと思ったが、やっぱり、現在高齢化で企業の雇用年齢も上がってるので若い人の参加は難しい。

ただ、中学生以上の人を巻き込んでふるさとがどういうところなのかを学んでほしいという思いがある。そのために今の活動を足がかりに、将来的に室蘭検定の作成につなげていきたい。

#### 【実績報告】

##### ○もとむろランチ事業

- ・コロナ禍のためレストランはしないで弁当宅配を行った。
- ・毎月第 4 土曜日に子ども 50 人×12 ヶ月で 600 人、大人は年に 4 回延べ 152 人に

提供。コロナ禍に加え、物価高もあったため、生活に困窮している方が多く、そういうところを中心に回った。

●質疑応答

C委員：長く活動を続けていただいておりますが大変ありがたいと思っている。事業の長期継続に向けてボランティアの育成や賛助会員の募集についてはどうだったか。

団 体：ボランティアについては高齢化が進んでいる。今は75歳くらいでも仕事をしていたりするので、できる人がなかなかいない。数がない中でボランティアに無理しない範囲で協力いただいている。

寄付金については問題なく集まっているので、ボランティアをどのように補充するかが課題。

F委員：今年度からは通常の今までのような食堂に戻すのか。

団 体：そろそろ宅配はやめて食堂を開く方向では考えているがまだ決まってはいない。

F委員：補助金が終わるので今後は自分資金が増えてくる。事業を継続していけるように、何とか頑張ってもらいたい。

団 体：寄付金については白鳥台の15町会から安定していただけているので問題はない。ボランティアをどうこれから確保するかが課題。

A委員：信頼関係の中でその家々の中まで見えている子ども食堂の事業はなかなかないと思う。地域共存というのは、何かあったときにそのくらいの濃さのつながりじゃないと本当は役立つものではないのかと思う。だからこの民生委員とつながって行っているこのもとむろランチのモデルをぜひ市にも注目をしていただいて、いろいろここから学ぶべきことがたくさんあるんじゃないかというのを感じた。

団 体：保育所勤務していたり、学校の嘱託職員の方などご家庭と信頼関係、つながりがあるので家庭の中に入っていける。それができたのは宅配したからであって、対面での食堂の中だけでは難しいと感じる。

宅配の時は子どもの家には子どもとつながりのある方、大人の方への宅配は民生委員さんと一緒に、というふうにやっている。

【閉会】